

降ってる方がまだましなのかもしれない。雨を見ると、感傷的な陶醉、ぼうつとした気持ちになってくる。

満員電車は憂鬱な、背広から醸される、湿った匂いに満ちていた。

会社に行けば、また嫌味を言われ、何かしようとする、一々出ばなを挫くように間違いを咎められ、悪気はないのに気が回らないことを意地悪に、悪意と嘲笑と憎しみを込めて突かれ、うっかり忘れてしまったことを見下し呆れバカにするかのように憎々しげに「あくあ」とか言われ、またもするのかと思うと、体を鉛のように感じる。気が塞いで、息が詰まる。怖い。

相談する気にもならない。言葉にするといかにもくだらない。切迫感が死んでしまふ。伝わらないだろう。そう思えるからだ。

理性では、甘いんだよ、とか、つまらないことさ、これが乗り越えられなきや駄目だぜ、とか、考えるけど、思考だけの空回り。虚しさ。何も実感にならない。胸の苦しさも癒えない。

逃避したい。早く作家になりたい。笑われるだろうな。誰にも言ったことはない。思うだけで、何もしていない。

そもそも、逃避で作家になりたいなんて、ふざけた話ってことなんだろうし、なれたとしても、実際、思ったような生活ではなくて大変だったりするんだろうし、人であり、社会的な生きものである以上、人間関係からは逃れられなくもあつたりするんだろうな、などとは、ぼんやり思ってみもするが、何も実感にならない。

実感にしたいのに、膜の内側にいて、現実に触れられないかのように、実感がない。僕にとって現実とは。

乗換駅でどつと人が降りた。僕は息を殺してじっと待つ。来た。

彼女が乗ってくる。ドキドキして、呼吸が、というよりは顔が苦しくなり、体の力が抜けた。たとえ声を掛けるきっかけがあつたとしても、とても声を掛けられる状態ではない。ましてやきかけなどまったく見つからない（運に任せ過ぎか？ だよな）。唐突に声を掛けたら気味悪がられるだろう。

イケメンならともかく、この、昏い、しゃべれない、イケてない、僕だから。

どう思うせいか、よけい美しく思える。切ない美しさ。

可憐な人だ。ユリのように長い睫毛と、華奢で、繊細な肌の、まばゆい白さ。儼い清楚さ。けれども、静かで、奥深い双眸、生命と意志とを感じさせる。僕にとつては、生きている真実だった。凜としていて、僕のような男を好きになるタイプの子じゃない、そういう敗北を感じる。

実際は、どんな人かわからないし、観じているだけの方が幸せなのかもしれない、などと自分を納得させていた。楽な方へと落ち着くわけだ。

細かい雨の薄い光が窓から差し、彼女に柔らかく当たっていた。年齢は二十歳だろうか、又は同じ年くらいか。思春期の少女のような青リリングでもあり、初々しく、天々たる桃でもある。

それにしても。見つめることが快樂だ。心地よい。癒される。けれど、怪しまれるので、チラ見しかできない。いつも足りない。いつまでも続いてくればいいのに。

僕は次の駅で降りなくてはならなかった。まもなくだ。あと数十秒。行かないで欲しい。逝かないで。

あゝ、そうか、そうだ、僕が降りなければ、いいんだ。そうさ、僕が降りなきゃ……

電車は速度を落とした。停まる。ドアが開いた。プラットホームに出て、雨の冷たい月曜の空気を吸う。雲の切れ間から青空の瞳が覗いていた。吸い込まれそうになるほど美しい。遠い。

第一章

雨は上がって、道路はまばゆかった。

沙羅乎はマックで昼飯を食べながら、スマホでゲームしてる。頭の中はさっきのことを何度も何度も執拗に思い返している。

半ば自動的だ。やめようと思っても、気がつく、同じ場面を繰り返し、その場面の中で、現実では言わなかったセリフを繰り返している。

あの失態は沙羅乎のせいばかりではない。先輩の本濤の指示を仰いだ。しかし、課長がいらした厭らしい怒り方で憤るとき、先輩からはフロアもないばかりか、自席で澄ましていた。

沙羅乎はよほど言いたかったが、言っても、本濤は逆上し、また例によって、自分があるとき言った意味はそうじゃなかったとか、微妙に論をずらして論ずるだろう。彼は自分に間違いのあることを認められないたちで（しかも、滑稽なことに自分が狭量でないことを示そうとするかのように、わざと間違いを大きな声で周囲に表明して豪快に笑ってみせたり、「いやあ、すみませんね」などと軽く謝つてみたりもする）、なおかつ、本人にはそういう自覚がなく、自分の卑怯な変節性に気がついていないようであった。

「まあ、ときどきいるタイプではある」

などと余裕をかましてみるものの、沙羅平は楽しまなかった。

「だいたい、人間なんて、みんな自分の都合で勝手なことを言ってるだけさ。本質的なものなんかない。自己保存の本能が働いて、（一見、そう見えないような回りくどいやり方や、敢えて真逆なやり方など、いろいろしてはいるが）自分を守っているに過ぎない。そうさ。気にするに価しない」

などと嘯いても見るも。気にしないことなどできず、胸は重く、息が苦しい。

会社に戻りたくない、と思ってしまうが、そんな勇気がないことも、彼自身がとてもよく知っていた。午後九時まで残業して退社した。仕事があつて遅くなるのだが、たとえ帰れる状況であつたとしても、帰れない。気を遣つてる、と言えば聞こえがいいが。

誰もそんなことを彼に期待しているわけではない。同じ年くらいの若い奴でも、帰る奴は気にせず帰る。誰も何も言わない。まあ、正確に言えば、たまに言う人もいる。でも、給料が減るわけじゃないし、叱られるわけでもない。

駅前の、横丁に入った路地にあるバーに入った。一回目だが、これは冒険だ。

ターキーがダブルで千二百円なので、滅多にいけない。給料は二十二万だが、手取りは十五万くらい。アパートの家賃が七万円だから、飲料も含め、食費関係は月当たり三万円を目標にしている。だが、行かずにいらなかった。こういう場が好きなのではないが、そういうことでもしなくちゃいけないような責務に脅かされていたのである。

入ると、今日もチャリー・パーカーが流れていた。ビバップを創ったこの天才サックス奏者は、なぜ「バード」と呼ばれたのだろう。鳥が空を翻り舞うように自在に吹けるから？　でも、それは真実からは程遠いようだ。もとはヤード・バード（囲いの中の鳥。ニワトリなど）と呼ばれていた。俗語で『囚人』の意味もあるらしい。

鬚を蓄えたオール・バックのバーテンダーが、

「いらつしやい」

今晚は、と応えなかったが、緊張で喉が詰まって、絞められた鶏の最後の声のような奇妙なうめきしか出なかった。

カウンターに坐る。

「ターキーのダブルを」

どうにか言えた。

琥珀の液体が喉を通る。熱いものをじわつと感じる。体に沁みていく。

スツール三つくらい離れたカウンター席に変わった身なりの人がいた。狭い店なので、カウンターの

端と端のような位置関係だ。

髪型はマッシュルーム・カットで、ペイズリー柄の入った暗赭色のベルベットのジャケットに、昏い緋色のサテンのシャツを着ている。シャツの襟と袖はフレイアになっている。モロッコ革のブーツに黒いレザーのパンツ。首飾りではなく、黒い帯のような飾りを巻いているのが、印象的だった。

エスニックな飾りをたくさんつけていて、サイケデリックな感じだった。

鳥のように鼻先が尖っていて、すっきりした顎がシャープだ。どうやら本屋らしい。いや、よく聞くと、書肆ということで、出版もやっているようだった。店は難久簀町の神中洲にあるらしい。

沙羅乎はスマホで本を読みながら、聞くともなく聞いていた。

「『山月記』の初版本が手に入ってね」

「初版ですか」

「正確に言うと、昭和十七年二月の『文學界』さ。当時は『文字禍』という作品と併せて『古譚』というタイトルだったのさ」

中島敦という作家の作品で、李徴という昔の中国人が主人公。彼は詩人として世に名を成そうとしたが、自尊心が強いのに自信がなく、自分の才能が大したことないと言われるのが密かに怖れ、同好の士とも交わらず、師にも就かず、結局、才能がありながらも世に認められず、悶々としているうちに心に棲む獣が嵩じ、獰猛な人食いトラに墮してしまった、というストーリーだ。

処女作を発表した昭和十七年に、急逝している。

沙羅乎は虚しくなった。帰ろうとした。

「今持つてる。これだよ」

その言葉に思わず、眼を遣ってしまう。サイケデリックな人は沙羅乎の方を向く。

「どうぞ。」

興味がおありですか？」

余裕のある微笑だった。

だが、沙羅乎は立ち上がりながら、

「いえ。」

失礼します。お会計を」

そう言って店を出た。

「同好の士とも交わらず……か」

翌朝、彼は勇気を出して会社を休むと上司に連絡し、いつもの電車に乗った。

彼女が乗るのを確認する。いつもの駅で降りなかった。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
0